

11) 平成17年度院内生に実施したPBLチュートリアル の概要と評価

○清野 晃孝, 釜田 朗, 影山 勝保
田代 俊男, 中條 雅人, 黒田 知英
小磯 和夫, 齋藤 高弘, 鎌田 政善
(奥羽大・歯・診療科学)

【目的】自ら問題点を的確に抽出し、周囲と協調しながら変化に適切に対処できる人材の育成に教育の重点がおかれるようになった現在、PBLチュートリアルが歯学教育に急速に取り入れられている。そこで当講座では、平成17年度臨床実習の二期実習において、PBLチュートリアルを試みたのでその概要とアンケート結果を報告した。

【方法】平成17年度から実施したPBLの概要として、対象は5学年の107名であり、時間帯は月曜日から金曜日の午前中9時から正午までの3時間とした。1グループは6人から8人とし、各グループは週に1回、4週連続で、合計4回実施した。4回目には症例発表会を行い、アンケートを記載後、チュートリアルノートを提出させた。今回は初めてであったことから曜日毎に、同じチューターを配置し、5名が担当した。

アンケートの内容は、実習方法、内容の質、内容の量、シナリオ、グループ学習の時間、グループ討議の時間、自習に費やした時間、グループ討議への参加程度、チューターの介入度、学習効果の10項目についてであり、それぞれ5段階の評価として記入してもらった。

【結果と考察】平成17年度から開始した第5学年を対象としたPBLチュートリアルは、全体として学生からよい評価を得るとともに自学自習の目的意識を高める興味深い学習方法であるとの結果を得た。今回のシナリオを含めた学習内容の質は適切であると評価された。また、1回3時間、4週連続のプログラムは概ね適切と評価された。今後、学生の興味を持続させるような学部全体としてのPBLチュートリアル教育の構築が必要と考える。

12) 71歳男性の両側舌縁部に発生した脂肪腫の 1例

○塚本 光, 丹治 祥大, 浜田 智弘, 小板 橋勉
金 秀樹, 高田 訓, 大野 敬
(奥羽大・歯・口腔外科)

【緒言】脂肪腫は成熟した脂肪細胞の集合からなり分葉状の胞巣構造を呈し、線維性被膜により被覆された病変である。通常は、後頸部、肩部、背部に生じることが多く、口腔内に生じることが稀である。今回、私たちは71歳男性の両側舌縁部に発生した脂肪腫の1例を経験したので、過去の報告と合わせて検討を行った。

【症例】患者：71歳男性。初診：平成17年3月。主訴：両側舌縁部の腫瘤の精査。既往歴：高血圧症、糖尿病、狭心症にて投薬加療中。現病歴：1か月ほど前より両側舌縁部に腫瘤および接触痛を自覚。近歯科医院受診し歯の鋭縁削合にて接触痛消失するも、腫瘤に変化は認められず精査のため紹介により当科初診となった。臨床所見より両側舌縁部の脂肪腫を疑ったが、他の腫瘍の可能性も考えられたため、右側舌縁部の生検を施行した。粘膜を切開すると内部より薄い被膜に被包された黄色透明な脂肪組織が露出した。脂肪様組織は分葉状で広範囲に広がっており、機能障害を起こすリスクを考え全摘出は行わず腫瘍減量術とした。左側に関しては病変が限局していたため、全摘出を行った。病理組織診断は両側とも脂肪腫であった。術後1年半の現在、再発等の異常は認められない。

【考察】舌脂肪腫の発生は稀であり、私たちの渉猟し得た限り本邦では自験例を含み30症例報告されている。そのうち両側舌縁部に発生した脂肪腫は10例であり、その他は単発性脂肪腫であった。過去の報告と合わせて検討を行ったところ単発性脂肪腫に比べ、両側性に発生した脂肪腫の発生年齢は高く、男性に多い傾向がみられた。また単発性脂肪腫に比べ両側性に発生した脂肪腫では、高血圧症、糖尿病、アルコール性肝炎などの脂質代謝や糖代謝の異常に関する全身的要因の関与が強いことが示唆された。